仏師定朝（じょうちょう）と定朝様（じょうちょうよう）

熊谷操子

「おーい、いい加減にしろよ。団体がもう三組も出て行ったぞ」と、夫の不機嫌そうな声が入口から聞こえて来た。きっと眉根に相当な皺を寄せていたのだろう。

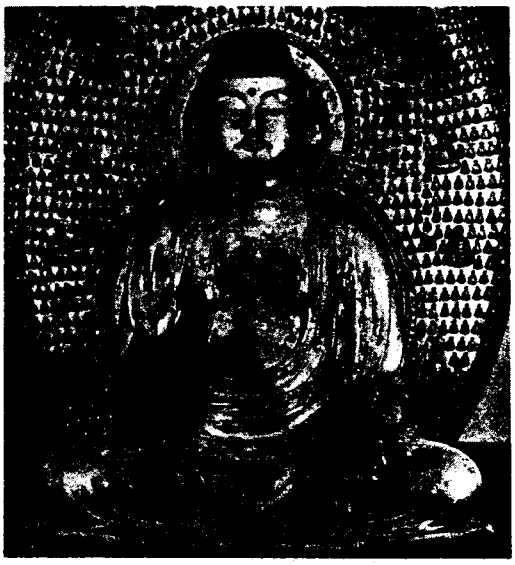
日本で唯一残存している名匠定朝作の、丈六阿弥陀如来に会いたくて会いたくて、やっとその念願のかなった、昭和五十五年晩秋のある日の事だった。藤原頼道建立の宇治平等院鳳凰堂の中堂の内部で、陶酔の虜になり果てゝいた私めは、やっとその声で目覚めた感じがした。

八角九重の壮厳な蓮華座の上で、静かに定印を結んでいる阿弥陀如来の姿は程よく豊満で、肩の線も実に美しい。一昨日の邪心も、昨日の悪事も、みんなお見通しなのに全部包み込んで、「許しましょう」と、言って居られるような気品のある半眼がとても素晴しい。円満で仏徳を湛えた典雅な相貌の中から、溢れる慈愛の心を見つけた思いがした。流麗な衣紋は、貞観期の仏像と同じ翻波式でありながら、その彫りはあまり深くなく、割合サラリとしたものが感じられる。まるでゆるやかに流れる水のようで、その衣紋にさえ、すがって甘えてみたい思いがする。光背は、二重円相をもつ飛天光で、その中の飛天と、周囲の天井小壁にある雲中供養菩薩（定朝の弟子達の作品）とが呼応して、堂内全体で別世界の交響曲を奏でているようであった。若し音が聞こえたとしたら、それは陶然たる極楽の音と言えるかも知れない。私はふと、今まで見た蓮弁との違いに気付いた。四重の弁は行儀よく下段の弁に従って重なっ

平等院鳳凰堂

ているではないか。そしてその湾曲はなだらかで美しく、いつぞや旧家で見つけた古い碗の曲線を連想させるのだった。華麗な大天蓋の縁には、宝相華文の透かし彫りの宝簾が、ビラビラと美しく下がっている。まさに芸術の宝庫である。宝池の向こうから写真家が撮った小格子も念入りに見上げて、ひとりうなずきながら鳳凰堂を後に、やっと夫の声に応じた。

始めて見た定朝作にすっかり魅せられた私は、次の年の秋、京都と奈良の県境にある浄瑠璃寺（九品寺）に参った。浄土信仰が盛んであった平安中期以降には、九体阿弥陀堂が相当数造られたらしいが、この寺が現存する唯一の遺構と聞いている。一一〇七年の造立で、阿弥陀堂の定法通りに宝池を前にして東面している。本堂前の紅葉と、緑の樹々も池の面にその影を落とし、より華麗な演出を見せている。うっそうとした緑に囲まれた池を隔て、桧皮葺の三重の塔がある。女性的とも言える優しい型のこの塔の内部中央には、薬師如来が安置されていると聞く。これは高倉天皇が京都一条大宮から移築されたものらしいが、その前身は分からない。この天皇のファンである私はふと、小督局との悲恋を想い又、那須の与一が射落した扇まで連想した。まるで住宅のような簡素な本堂内に入って驚いた。九体の阿弥陀如来がずらり並列しているその壮観に、思わず息を呑む思いがした。中尊は周丈六で来迎印、左右の四体はそれぞれ定印を結び半丈六である。素人の私の眼にも、ほんの僅かづつ違う作風は感じられるが、穏やかな面相や、ゆったりした肉づけは、やはり何と言っても定朝作と共通する点が多いと思った。始めて化粧する女性が一応描きそうな眉で、美しい三日月眉である。中尊（定朝様）の光背の文様は単なるブツブツに見えたが、よく見るとその一つ一つが小千仏であり、その中にいわゆる十体仏が浮き彫りになっているのである。うなる様なその最高の芸術に、機械力の乏しいこの時代に、よくもこんな手の込んだ物が出来たものだと、惜しみない讃辞を心の中で送った。今も眼を閉じると、九体阿弥陀の姿が鮮かに浮かんで来る。浄瑠璃寺から岩船寺へと歩く山道には、さゝやかな無人店がそこかしこにあって、野菜や果物、漬物等がぶら下げてある。近在の農家の作品で、何れも百円（当時）の値をつけ「竹筒に代金お入れ下さい」と、書いてある。参詣の往き還りの人々が、品定めしながら三三五五買ってゆく。のどかなのどかな風景だった。



京都日野にある法界寺は、土地の人々には乳薬師の名で知られている。開創の時期に就いては二つの説があるが、永承六年（一〇五二）日野資業が菩提寺として創立したらしい。広々とした礼拝の空間には静かな雰囲気が流れ、まるで肩の荷を下ろした時のような、ホッとしたものを感じた。さすが鳳凰堂の阿弥陀如来のそっくりさんと言われるだけあって、丈六のそのお姿全体が実によく似ている。台座も殆んど同じ、蓮弁のあの珍しい重なりも同じである。強いて言えば、二重円相の文様が少し違っていたが、それは、それを彫る仏師の自分なりの持味をどこかで表現したかったのであろうと思う。天井の小壁の供養菩薩と共に、楽器や蓮華等が飛び交うような壁画が私の眼を奪う。勾欄の反り具合や、天女壁画の色彩の褪せ具合等は、私達の眼にはかえって重厚に映り、歴史の重みがひしひしと感じられる。静かな鄙辺にある千年の古刹に佇っていると、古都を訪れる事の出来た喜びをかみしめる事が出来る。

4

双ケ丘と聞けば、あの兼好法師、法然草を先ず想い起こすのである。ある日その双ケ丘にある法金剛院を訪れた。ここはもと清原夏野（小野篁等と共に令義解を著した人）の山荘であったが、一一二九年（白河法皇の崩じた年）鳥羽上皇の中宮であった侍賢門院が（当時二十九才）再建した。その後十一年をかけて、西御堂、南御堂、北斗堂、三重塔、大庭園、女院御所等を作る。そしてこれが法金剛院御所となるのである。西行も度々ここを訪れている。現在のこの本堂は、焼け落ちた西御堂の上に再建されたものと聞く。だから現在のこの阿弥陀如来は、当時西御堂にあったものだろうと、角田文衛博士は書いている。周丈六の阿弥陀如来は、私が今まで見た定朝様より、ほんの少し面長の感じで沈静という言葉がぴったり。八角七重の蓮華座であるが、その蓮弁の一枚一枚を一応粟粒を並べたような魚子地に仕上げ、更にその上に宝相華文を美しく叮寧に彫ってある。なかなか優雅で豪華そのもの。その重なりは定朝作と違い互い違いに重なっている。飛天光背に刻まれた七体の菩薩は、それぞれ楽器を持っていてその巧みな透かし彫りは、又一味違った美しさを見せている。この像は仏師院覚の作品で院覚の持味を、その蓮弁に十二分に発揮出来たものと言えるのではなかろうか。城待門院が年若い崇徳天皇を案じたものか、外の薄幸な二人の皇子の事を祈られたものか、それ共美福門院との確執に悩まれての事か、白河法皇の回向を願われたものか、この阿弥陀如来への願いは知るすべもよく、ただ想像を許され

るのみである。当時、西御堂にはこの如来、三重塔には同じ院覚作の大日如来四体、南御堂には九体の阿弥陀如来、北斗堂には賢円作の一字金輪像、これら十五体にも及ぶ仏像群の中には、やがて渦巻く潮流と化す〝保元の乱〟の導火線を、じっと見つめていた仏像があったかも知れないと私は思う。ともあれ、比類のない落ち着いた装飾美に酔うことの出来たしあわせな日であった。

鳥羽上皇終焉の地として知られる京都伏見区竹田にある安楽寿院を、地図を頼りにやっと探し当てた。鳥羽上皇が、鳥羽殿の東殿の一部に創建したのがこの寺の始まりであるから、ちょうど侍賢門院が、法金剛院の南御堂（九体阿弥陀堂）の造営を始めたのと同期である。市内とは思えない程、たまらない静けさを漂わしている環境に、懐旧の思いをそそられるのであった。平安時代の石造三如来像（江戸時代の発掘）や、宝篋印塔のある境内地に佇っていると、温和な御性格の鳥羽上皇の院政を執るお姿が脳裡を掠めるのである。住職は留守であったが、前日に電話をしておいたので、娘さんが阿弥陀堂の鍵を開け、更に厨子をうやうやしく開けると、「どうぞゆっくり拝観して下さい」と、引き揚げてくれた。厨子の上部には赤い錦の幕が張ってありその上に大きくて立派な華鬘が下がっている。よく見るとその少し上に、同じ大きさ位の菊の御紋がついている。瞬間異様な感じがしたが、磯長の叡福寺（聖徳太子の墓所）でもこれに似た感動を覚えたことをふと思い出した。仏師賢円作のこの阿弥陀如来を見て先ず感じたのは、頬の辺りが今迄見た定朝様より少しスリムである事、それに眼は殆んど開いていないように見受けた。何よりも変っているのは、胸に卍がある事だった。どんな意味があって上皇が仏師に注文されたのだろう。正面の蓮弁五枚にだけは、宝相華文などを叮寧に彫り、装飾性豊かに表現している。二重円相光が素文光背であるのも、この時代としては少いのではないかと思う。　阿弥陀の造仏を上皇から命じられた仏師賢円は、平等院の定朝作阿弥陀如来を見学に出かけている。そして賢円の仏所（工房）へは、鳥羽上皇が度々足を運ばれ、製作中の仏像について、かなり厳して批評を加えていられる。胸の厚み、首の角度、衣紋の細部の削り等も、定朝作を引き合いに出して修正をさせていられたと聞く。これらの注文を忠実に守って彫る仏師賢円の酷しい眼まで、私は識らず識らず想像していた。温厚な鳥羽上皇の鋭い批評眼によるこの阿弥陀如来には、どのような願いがこめられていたのだろうか。堂の右上の壁には、鳥羽上皇、美福門院、八条女院の

画像がかかってあった。軸があったのを復製したものだという。それにしても、これで観る限り、美福門院はあまり美女ではなかったなあと思った。細部までゆっくり拝観させてもらい、悪いと知りつゝ存分にカメラに納めさせてもらった。境内地には、鳥羽上皇の御陵と、近衛天皇の多宝塔御陵があった。観光の喧噪から逃がれ、閑静な寺でひとときを過ごせたやすらぎの一日であった。

その日の岩手県は、底抜けるようなどしゃ降りであった。金色堂と、毛越寺と、達谷の窟を回って欲しいと言うと、タクシーは一万二千円を要求した。値切りの天才を自負している私なのに、藤原三代が、ミイラで眠るその謎とロマンに光り輝く中尊寺金色堂が目前にあるという喜びに、見事上がり切ってしまって、値切ることなど念頭にはなかった。都では白河、鳥羽、後白河三代が院政の世紀を形作っている時、ここでは藤原三代が平泉の歴史を作っていたのだ。たゞ支配者の豪奢を実現しただけでなく、都の貴族文化の形より以上に超える心を、奥州すべての金で表現したかったのであろう。清衡、基衡、秀衡の三体の須弥壇からは、たゞたゞもう眼を奪われるばかりであった。そしてその壇下には金箔を貼った木棺が納まっていると想像するだに身震いするような感動を覚えるのだった。拝観の位置は仏像より随分離してあるので、細部にわたって観察する事は出来ないが、まばゆいばかりの三尊像が地蔵菩薩六体を従えたその鷹揚たる姿は豪華というより外に言葉は見つからない。平安時代の六体一具地蔵菩薩が現存するのは、この金色堂のみと聞く。下半身を包むそれぞれの衣紋から、荘厳な仏教音楽のハーモニーを聴く思いがした。中央壇の阿弥陀三尊と地蔵六体は同じ仏師群の作品か、どれも眼尻は少し上がり気味で切れ長のとても素晴しい眼だった。宝相華唐草文を彫り出した内陣、入念な漆塗りに螺鈿を存分に散りばめ、菩薩像の蒔絵を交互に組み合わせた巻柱には、唸りとため息を禁じ得なかった。金色をこれ迄に残した保存の技術も賞讃すべきだが、これを造った仏師の入念さにも思いを馳せたい。平泉から指名招聘された都の仏師としては名誉でもあるし、大いなる喜びに胸震わせたであろう。だからこそ仏師の誇りを余す所なく表現したのだと思う。ともあれ金色の芸術に圧倒され、魂が宙に浮いた平泉の旅であった。

京都の万寿寺にも定朝様の優作がある事を知り、夫を促して出かけた。

地図通りに東福寺駅前をうろうろしたが見つからない。東福寺の塔頭である退耕庵（石田三成が宇喜多秀家らと関ケ原合戦の謀議を計った所）の若い僧に聞くと「万寿禅寺というのは、そこの九条通りの向こう側にありますが、定朝様の仏像があるなんて話聞いた事もないし、観光目的の寺ではありませんよ」「それでも行かれますか」を、何度も何度も繰り返しながら、私達の姿を上から下まで、ジロジロと見る。やっと万寿禅寺を見つけた。入口の碑の側面には日韓友好云々……と、なにやらゴチャゴチャ彫ってあった。なる程立派な仏像のある気配もなし、荒寺の雰囲気充分でひと気がない。本堂がただ一つ、それも障子が締め切ってある。恐る恐る裏へ回ってみると、私の身長以上もある巨石が二つ重なっている。何の事はない重ね餅のお化けのよう。ひょっとすると祈りの対象かも……と、掌を合わせて早々に退散した。東福寺へ参って泉湧寺迄の裏道を歩いていた時、小さなパン屋を見つけたので、その店の人に万寿寺のことを聞いてみた。この人もそんな有名な仏像の話は聞いた事もないと言う。

私の幼い頃、母がよく唄っていた京都のわらべ唄をふと思い出した。それは南北する烏丸通りを、丸太町通りから南へ、東西に横切る通りの名を唄ったものである。「丸竹夷ニ押御池姉三六角蛸錦四綾仏高松方五条」と、唄いながら京都市内の地図を拡げてみた。万寿寺通りはあるが、寺の印はどこにも見つからない。疑問を抱いたまゝのある日、林屋辰三郎著の〝京都〟に目を落としていた。万寿寺の阿弥陀如来が、京都国立博物館の玄関を飾っていると書いてある。思わず「あった」と叫んだ。でも、それではかつて五山の一と謳われた万寿寺は、はてどこにあるのだろう。思い切って先日行った万寿禅寺に電話をしてみた。若そうな声の叮寧な住職の話では、「万寿寺通りに昔はあったそうですが衰退の一途をたどり、随分前にこと三聖寺に合併したそうなんです。それで現在は東福寺の塔頭となっております。阿弥陀さんは博物館から東福寺の宝物館に移っております」との事だった。「折角東福寺へ回ったのに」と、禺痴りながらすぐ又東福寺へ電話してみると、「春秋の法会の時にだけ拝観して頂きます」という返事。度々の身売りの憂き目をみた阿弥陀如来が何だか哀れで、これを造った仏師は彼岸できっとため息をついているだろうと思った。こうなると女の意地で、当時の大作と賞讃された阿弥陀さんには、是非是非会いに行かねばと、十一月第二日曜へ手ぐすね引いている。

県内でありながら、なかなかその機を得なかった牛田の不動院へ、やっとチャンスを見つけて出かける事が出来た。前日電話を入れておいたので早速金堂を開けて貰った。薬師如来の側に、「行基の真作、薬師如来」と、書いた大きい木札が立てゝあったが、これは七、八世紀の作では決してない。「寺そのものは行基開基ですが、如来さんは平安後期の

ものでございます」と、住職も言う。「矢張り定朝様であった」と、喜びが私の中を駈けめぐる。光背や台座等の金色の輝きは、割合新しい時代のものと見た。兵火に会って光背も台座も、勿論日光月光菩薩も外へ運び出す事が出来ず、辛うじて本尊のみ運び出したのだろうと住職は言った。その時はもうこの如来も煙に巻かれていたか、又は炎がそこ迄近付いていたのではないかと勝手に想像する。目鼻立ちがあまり鮮明でないから。白毫と衣の一部にほんの少し金色を残している如来は、まさしく藤原彫刻だと思った。二脇侍のいない空席を十二神将がちゃんと埋めていた。

昭和六十三年三月、末森さんの例会の資料をバスの中で読んでいた。さまざまの名を連ねた善根寺の仏像、その数の夥しいのにたゞたゞびっくりした。その中に私の胸を衝いたのは重文の木像薬師如来だった。まさかこの日の例会で定朝様の如来さんに会えるとは思っても見なかった。宝蔵庫は村の人達の浄財で建てられたと言う事で大変有難いとは思ったけれど、これほどの素晴しい平安朝の仏像群を蔵めるのなら、欲を言えばほんの少し広く、ほんの少し高く建てゝ欲しかったなあと、門外漢である私が勝手な禹痴をこぼしてみるのだった。問題の薬師如来の輪光背は後の時代に付けられたものとしても、それが殆んど天井にひっついていて、如来を押さえつけているようで本当に惜しい。でも定朝様特有の典雅な姿が王朝芸術の一端として、手の届く所にこうして残して置いてもらってるのは大変嬉しい。重文に指定されても、それがいざ修復となるとなかなかその費用の捻出がむつかしいらしい。例に洩れずここの二三の台座にも、いかにも素人細工のその場凌ぎの修繕が施してあって寂しい思いがした。稲村山城主であった田坂氏の祈願所という善根寺って、きっと大きい立派な寺だったのだろう。呪わしい戦火や、阿鼻叫喚の洪水も、今は黙して語らぬ仏像群に、私も黙って静かに目礼するのみで急いでバスの客となった。

湖東三山の真中の寺として有名な金剛輪寺に参る事が出来た。聖武天皇の勅願で、行基が七四一年に開山した千古の名刹は、観光客で大変賑わっていた。夥しいコピーの水子地蔵を左右に見て、「寺はどうしてこう高い所へ建てたがるのだろう」と、ぼやきながら石段をフーフーと登っていく。薄暗い内陣の高い天井や太い柱は、密教修法の護摩で真黒に煤けている。沢山の仏像の中で、来迎印を結ぶ半丈六の阿弥陀如来は、浄土信仰が普く浸透した平安時代末期の作品らしく、その螺髪も美しく、

落ち着いたそのお顔はとりわけ端正だった。両足の間に垂れた衣紋の重なりが、まるで今様のフリル風に見えて興味をそゝった。光背は板光背に彩色を施したものであった。塗り替えてもいない、補正もしていない像には、そこはかとない魅力が感じられて、いつまでもいつまでも佇んでいたい気がする。体内の墨書銘から、大仏師近江国の講師経円が造像して四年の歳月を費したことが明らかになったそうである。微かな曲線を見せた額の螺髪と、フリル風の衣文とに、仏師経円の個性をちらつかせたのではないかと私は思う。

滋賀県栗東町荒張部落の外れに、金胎寺という静かな里寺がある。苔の美しいなだらかな石段を登ると、もうそこは本堂で、その前には小さな花々が控え目に咲いている。天智天皇の勅願によって大和国（奈良県）高市郡に建立された大久保寺がその前身で、平安時代の半ばに、僧蓮秀が衰退した寺を再興した。寛文三年（一六六三）に現在地に移って金胎寺になったそうである。半丈六のこの阿弥陀如来の特長は裳懸座であること、その上三尊一具で残っていること、そしてこの三尊を守る持国天、増長天も逞しい姿で残されている。こんな例は大変珍しい。住職の話では、当時は勿論四天王揃っていたと思うが、兵火若しくは、度々の移転で二体が無くなったのだろうということだった。阿弥陀如来の穏やかなその面相は定朝様の典型的な作例で、裳の裾の下側は華足、下敷茄子までよく見えているのだから、裳懸座と雖も、下から六重までは元来の台座同様で、唐風の美事な意匠を心ゆくまで表現しているから豪華で実に素晴しい。如来も二脇侍も殆んど金色が残っていない。強いて言えば白毫と目尻にほんのちょっぴり残っている程度で、漆黒という言葉がぴったり。二脇侍の腰のひねりの線も、可愛いく美しく表現されていて、ふと薬師寺の二菩薩の姿も浮かんで来た。じっと観ていると歳月の重みが快く感じられ、堂内に落ち着いた雰囲気をかもし出していた。仏像に比較して、唐草文様の中に小仏十一体が、それぞれの印相で浮彫りにされている飛天光背の金色が割合鮮やかなので住職に聞いてみた。話によると、文化財として指定を受けた昭和三年四月に光背の一部を修繕し、その時に塗り替えたらしいこと、同時に体内から墨書銘が発見されたという事であった。早速無理を言って胆内記の写しを見せてもらった。それには四十名ほどの奉加助成の名が連ねてあった。約半分は僧であり、その中に秀の字のつく名が三、四名あったような気がした。それは蓮秀の縁につながる僧達ではなかったかと想像してみる。あとの半分には藤原、清原、秦、物部等の姓が見えた。それによると永治二年（一一四二）に造立された事が分かった。残念ながら仏師の名は見当たらない。製作年代や奉加名まで明らかにしてあるのに、どうして仏師の名を堂々と書き入れなかったのかと疑問に思う。この寺の稲岡住職は、昭和二十七年大正大学卒業、同二十八年に、小さめの口少しゆっくらした頬のこの阿弥陀さんに惚れて晋山したと言っておられた。勿論初対面であるのに、じっくりお話を聞いているうちにとても親しみが感じられ、以前からお会いしていたような気さえする。折を見て是非またこの静かな寺を訪れたいと思っている。

塩飽例会の船の中で神谷先生から「今から行く島にも定朝様があるん

ですよ」と聞かされて、思いもかけぬ話に瞬間胸の踊る思いがした。台座の説明を延々と聞かせる住職に「もうその辺でよろしいから早く観せて下さい」と、叫びたい衝動をじっと押さえて耐えていた。きっと難しい顔をしていたのだろうと思う。宝蔵庫に足を踏み入れるなり、「あっ惜しい」と思った。それは一目で、後の時代にひっつけた輪光背を見たから。しかもそれが後の板壁にペタッと張りついているようだった。宝相華文の中で、泳ぐように舞う飛天の立派な光背を想像していた私は、ちょっぴり気落ちした。でも嬉しいのは仏像はさすが定朝様、当時の貴族達を魅了してやまなかった典雅でたぐいない調和の美を、こんな小島に見つける事が出来たのだから。健康な人も、病める人も、みんな温く包み込んでしまうような薬師如来のほのかな抑揚に、「お会い出来ましたね」と、声したくなるひとゝきであった

京都の万寿寺通りの一つ北側の通りが松原通りである。建仁寺の塔頭である珍皇寺はこの通りにあって、八月七日から十日までの四日間は、六道参りの人達で大変な賑わいを見せると聞いている。切子燈籠や槙を売る店、その他の屋台店の間を、縫うようにして通る鐘や太鼓の物凄い群が、精霊の迎い鐘を頼りに松原坂をゆっくり上ってゆく、その有様を見ているだけでも楽しいそうである。門を入ると右側に小野篁と閻魔さんを安置した堂があった。小格子の間から覗いてみると、篁は長身でなかなかハンサム。閻魔様はいつどこで見ても同じあの恐しい顔。境内は肩張ったようなたゝずまいは全然なく、いかにも庶民的な寺であった。この寺は盂蘭盆に突如として人が集まるという故か、私の行った日は住職も、寺の監理人も居らず、定朝様の阿弥陀如来も、篁が冥府との往還に出入りしたという伝説の井戸も、残念ながら観ることは出来なかった。京都の夏は極めて暑い。人一倍暑がり屋の私は、再び珍皇寺を訪れる事はないかも分からないが、老婆がのんびりと孫の守りをしていた、あの魂の故郷みたいな寺に、定朝様式を忠実に踏襲した作品のある事を信じて、その姿を勝手に造り上げて想像することにした。本堂脇のユニークな鐘楼の鐘を撞いて、鳥辺野の煙と化した人達の回向の真似事でも出来たのだからと、負け惜しみを暖めながら空振りに終わった珍皇寺を後にした。

京都山科にある小野随心院の境内地の四季は、おりおりの樹々や花々が美しい。先日訪れたのは、さつきがそれぞれの美しさを競っている時だった。創建は空海の弟子仁海が、一条天皇（九九一）からこの地を賜った時であって、祈雨の効験あらたかで知られた寺である。その後堀河天皇より門跡の宣旨を賜りそれ以来随心院門跡となったとか。小野小町の屋敷跡、化粧井戸、深草少将百夜通いの道、庭園、玄関、総門、庫裡、書院、能の間等へ大勢の観光客がひしめいている時、私達夫婦はその狂騒から逃れ、僅かな隙間にある静かな刻を見つけて本堂に座す事が出来た。七体のそれぞれの仏像は、沢山の時代を経てきた証に漆黒を見せている。随分離れた場所にロープが張ってある。それより少しでも上半身を乗り出そうものなら、びっくりするような音でベルが鳴るのであまり細部まで観る事が出来ない。小野小町が自分へのラブレターを貼って造ったという文張地蔵の横に、私の目指す阿弥陀如来があった。輪相光背

だけのつつましい像であったが、平安後期の作品とあって矢張りここも金色は全然見当らない。深い思索を経た人に見られるようなもの静かな面相と、その半眼にはなにか神秘性を湛えているような気がしてならなかった。

三滝寺へ阿弥陀如来を拝観したい旨の電話を入れた。「十一月の法会の時だけで、平常はお断りしています」との返事。置いた受話器の上に私は思わず「ケチンボ」と、浴びせかけた。県内だからいつでも行けると思い込んでいた自分の迂濶さと、折角の楽しみに、平手打ちを食わされた腹立ちが交錯した、まるで駄々っ子のような咄嗟の自分の言葉に、ひとり苦笑した。

福島県の白水阿弥陀堂。大分県の富貴寺。真木大堂、宇佐大楽寺等々、直接中央の影響を受けたと思われるこれらの寺々は勿論のこと、京都の東福寺（万寿寺阿弥陀）、三千院、広島県の三滝寺など、まだまだ私の宿題は残っているが持ち時間の許す限り、ちぎれちぎれの旅路を重ねてゆきたいと思っている。

如来が如来であるための相は、三十二相八十種好もあるというから、有名でない寺にある仏像にも目を向け、寺の来し方のときどきの財政状況や、災害や、又修復さえも大っぴらに許されなかった時代の背景なども頭に置きながら、その作品を正しく観る観察眼を大いに養わねばならないと思っている。

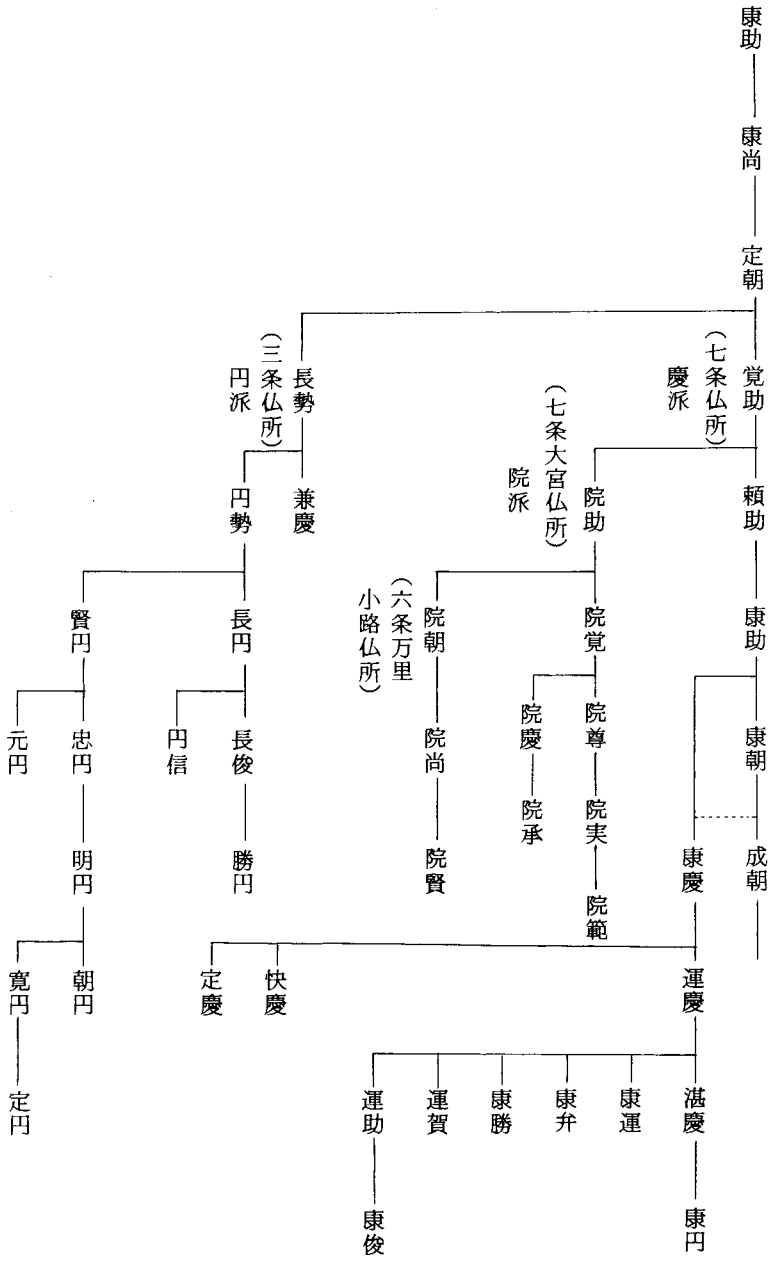
政治や仏教や文化は時代と共に変化してゆくのだから、造物界に於ける様式も大きく変遷を見せるのは当然と言えば当然である。でも定朝様にぞっこん参ってしまっている素人の私の眼には、飛鳥期の仏像は面長過ぎ、首は茶筒をひっつけた様に映る。天平期のものは形式にこだわり過ぎているように見え、延暦、弘仁期の仏像は概して胸の肉は盛り過ぎ目は大きく唇は厚過ぎる感がある。天長、承和期の眉や唇の線は稍不自然ではないかしらと思い、足先や腕等に神経を使い過ぎてはいないかとどうも気になる。貞観期の堂々たる体駆からは、かえっていかつさを覚え、なにかしら威圧されそうな気がする。その上翻波式衣紋の深さ、くどさが目立つようである。とは言っても、これ等前期の仏像にも、宗教のもつ美術的表現の意味は充分彫り込まれてあり、仏である事にいささかも変りないのだから、その前に佇った時、極く自然に頭の下がる思いはいずれも同じである。

定朝は十一世紀に活躍した仏師で、仏師としては始めて僧綱の一つである法橋という位に任ぜられている。三会（御斎会、景勝会、維摩会）の講師を無事務めた学識の高い僧に与えられる位で、法印、法眼、法橋の三段階に分かれる。定朝の父康尚も功績はあったが遂に講師止まりで終わったとか。造仏だけでなく、仏教なる学問も大いに学んで身につけたものと思う。寺の中にある造仏所から、寺を離れて従弟制度の工房（仏所）を構える事が出来るようになったのは、仏師定朝の人間と腕が高く評価され認められたからに外ならない。当時の貴族の日記によると、定朝の指揮の下に大仏師二十名が、それぞれ五名づつの弟子を従え、造仏を始めてから五十五日めに二十七体の仏像を納めた。と書いてあったというから、恐らく分業という形で能率を上げ、技術的にも随分合理化

されていたものと思う。大集団を誇る工房内の仕事ぶりには、すさまじいばかりの気魄が満ち満ちていた事だろう。なに人をも包み込まずにはおれない、そこはかとない優しい表情、静かに流れる衣紋、流麗なる全体の姿、それら美への追究と、浄土への憧れが、より強くより大きく、定朝の腕に響いていたのだろう。全身で打ち込む槌の音には魂の響が漲り、飛び散る汗はきっとキラキラ光っていたと思う。全霊を傾けて刻み込むのみには、研ぎすまされた神経の音が聞こえたのではないだろうか。仕事の内容によっては、しわぶきも許されぬ厳しい刻もあったかも知れない。大仏師を含む弟子達は、造仏に全神経を傾注する真摯な師匠の姿に、吸い込まれるような鍛練の有意議な日々を過ごしていただろう。識る由もない当時の工房内を、私は好きなように想像展開し、日本彫刻史上の名工と謳われた定朝の、その人柄まで素晴しく描き上げ、識らず識らず自分勝手な方向へ逞しく育てゝいたのである。

万寿四年（一〇二七）藤原道長が、無量寿院で定朝作の阿弥陀如来の手に結ばれた糸の端を握りながら、六十二才の命を閉じた話はあまりにも有名である。円満具足の相好と柔和な容姿は、「尊容満月の如し」と、謳われて、穏やかで洗練されたその作品は、当時の宮廷や貴族達の心を、余すところなく捉えて離さなかったに違いない。それ以来造仏を一手に引き受けることになってゆくのである。時代と共に造仏材料も変ってゆき、金銅像から乾漆像。塑像、木像（一木造り、寄木造り）となるが、定朝はこの寄木造りの完成者とも伝えられている。その作品があまねく愛されたのは、勿論外面的のことが一番であるが、胎内を奇麗に内刳りしていて、材は割合薄く造ってあるから、重量の面でも従来の仏像より随分改良され、持ち運びに便利だったことも含まれていたのではないだろうか。それに優秀な仏師を大勢育てゝ抱えていたらしいし、抜きんでた統率力による分業によって、短時日で注文に応じた事も、大きい魅力であったかも知れない。

この定朝仏の様式は、以後広く造仏界を支配する如来像の規範となってゆくのである。そして貴族達の注文に応じた仏師達は、競って定朝様を見習ったという。仏師院朝は、参考にするため、定朝作の寸法を一日がかりで約七十ケ所にわたり詳しく採寸したと伝えられている。定朝は天喜五年（一〇五七）に亡くなるが、その後八十年を経過した後も依然として仏像の基準になっていたというから、仏師達が如何に模倣しようと努力したかが伺える。寺から離れて仏所を構えた定朝を祖として、以後その弟子達の代によって、それぞれ独立した仏所に分かれることになり、そこでは集団による分業で大量生産的な態勢がとられていたと思う。所在地によって七条仏所（慶派）。七条大宮仏所（院派）。三条仏所（円派）などと呼ばれ、定朝の弟子で三条仏所を開いた長勢は、広隆寺の十二神将を残しており、円勢は法金剛院の阿弥陀如来五体と不動明王一体を造っている。賢円は安楽寿院の阿弥陀如来を残し、法金剛院の一字金輪像一体と、法勝寺の阿弥陀如来九体を造っている。明円は大覚寺の五大明王像を残している。七条大宮仏所の院覚は法金剛院の大日如来一体を造り、阿弥陀如来一体を残している。

鎌倉時代に入り、定朝の直系である康慶、運慶等が現れ、新しく創り出

した様式によって定朝様の穏やかで優雅な尊容は次第に姿を消し、日本彫刻史は徐々に移行しながら、又新しい時代の幕を開けることになるのである。